

道の真ん中を歩いてもいいかも

おばあちゃんのつづり

「こんばんは、識字学級です。」

私は月に二度、学級生のお宅を訪問しています。訪問のたびに、「識字通信（プリント教材）」を渡しています。識字通信には、社会状況や人権尊重の呼びかけ、健康な体づくり、文字の練習などが載せられています。その通信をもとに話をしたり、文字の練習をしたりしています。

私は、識字学級の中で陽子おばあさん（仮名）に出会いました。陽子さんは、お話上手な明るい人です。

ある時、陽子さんは紙のつづりを出してきました。「私、通信の文字の練習は、毎回書いているのよ。」と大事そうにつづりを開いて、見せてくれました。つづりは今までの識字通信をきれいにとじ合わせたものでした。そこには、文字の練習のお手本の横に陽子さんが書いたプリントもありました。読ませてもらうと、点や丸（句読点）まできちんと書かれています。字を見ると、一文字一文字丁寧に書かれていることがよくわかります。とめ・はねもしっかり意識されていて、消しゴムで何回も消した跡もあり

ります。文字を本当に大切にしようとする気持ちが伝わってきました。

一緒に訪問している小学校の先生が「お上手ですね。今でも練習をしているのですね。」と声をかけていました。陽子さんは嬉しそうに、「ありがとうございます。上手ではないけれど。この年になると、書かんと忘れてしまうよ。文字の練習が届くと、忘れんごと、練習しているとよ。」と楽しそうに笑顔で答えてくれました。

続けて先生が陽子さんに尋ねました。「文字の練習をしてこられて、どうでした？読めるようになって、書けるようになって、何か変わりました？」

少し間があつて、陽子さんはゆっくり語りだしてくれました。

「文字の練習をする前は、生きることに関心一杯だったから学校にもあまり行けんで、引け目を感じてたね。これまで書いてきて、読み書きできるようになってからは、今までできないと思ってきたことをしてみようかなと思えるようになったよ。そうね、自信がなくて縮こまって、道の端を歩いている気持ちから、もっと自信を持って胸を張って、『道の真ん中を歩いてもいいかも』と、思えるようになったよ。」

文字を少しずつ獲得し、社会の様子がもっとわか

るようになった、いろいろな人々と楽しく話すことができるようになった喜びやその自信、さらにはその努力の積み重ねが、陽子さんが一枚一枚大事にしているつづりなんだと実感しました。

識字って？

私が通っている識字学級では、文字を大切にします。

部落差別による貧困やいじめから学校に行けず、文字を学べなかった人たちがいます。文字を読み書きできるようになりたい思いから文字を学ぶ運動が広がり、ひらがなやカタカナを覚えることから始まったのが識字学級です。

文字を取り戻すことで、社会の動きに気づくようになります。いろいろな仕事につく機会が増えます。社会を見つめ、自分の思いを伝えることができるようになります。文字を学ぶことは、差別を見抜く力になり、差別に立ち向かっていく力になるのです。

識字から鉛筆

識字に学び、陽子さんから文字を奪ったものは何なのか。文字を取り戻していくとはどういうことなのか。少しわかったような気がします。

「文字をおぼえて、はじめて夕焼けがうつくしい」と感じたという、同じく識字に学ぶ高齢者の文章を見たことがあります。貧しさや差別によって学校に行くことができなかったこの高齢者の言葉は衝撃的でした。部落差別は、当然保障されなければならぬ教育を遠ざけただけでなく、「美しいものを美しい」と感じる感性までも奪っていたのです。これを取り戻していったのが識字運動だと思います。

鉛筆が折れるくらい一文字一文字に力をこめ書き上げた高齢者が、「鉛筆が重たかー。」と言いながら見せてくれる笑顔の裏にあるものを見失ってはならないと思います。

「道の真ん中を歩いていいかも」と語ってくれた陽子さんは、今日も識字プリントを前に鉛筆を握っています。

